



二天一流の世界（下）

一川 英機

(5) 五方の形について

剣法の起こりは、身を護ることから始まっている。我が身に危害を加えない者に対し此方から攻撃を仕掛けることは剣の道からすれば理不尽である。まず身を大事にする。それに対し相手が無理無体に危害を加えてくる場合にはそれを咎（とが）める。そのため的心術、技術の錬磨が道の本来の姿である。静かな姿の中に、常に百倍、二百倍の気力と動きを蓄えている。それが「頭上満々、脚下満々」の気力を蔵した姿である。五輪書「水の巻」に、「五つのおもての次第、第一の事」から「おもて第五の次第の事」まで五本の形の解説が懇切に伝えられている。にもかかわらず、何度読み返しても形にならない。五方の形の一方も形にできないのである。その道の先人先達から手取り足取りして伝え受けなければ伝統の伝承はできないものと身をもって体験したことであった。流祖にしてから「水の巻」に限らず各章の句切りには、「能々吟味すべし」「能々鍛錬すべし」「能々心得べきもの」と一層の鍛錬の声をかけてくれている。五方の形は流祖新免武蔵玄信が修行の集大成として完成させた形で次の五本からなる。

一、喝咄（かつとつ）切先返し 中段の構え
二、義談（ぎだん）の構え 上段の構え

三、水形（すいけい）の構え 下段の構え
四、重氣（じゅうき）の構え 左脇の構え
五、右直（うちよく）の構え 右脇の構え

この五本の形は、荒々しき、激しさ等はなくあたかも能の舞の如く静かな動きの中に、「頭上満々、脚下満々」の「気」と「一寸の見切り」「五分の見切り」の問答を表す形である。使用する木剣は大刀が「三尺三寸五分」、小刀が「二尺」。軽く薄い櫛材を用いる。これは腕力をつける意はなく、太刀の道筋をよく知らせるために工夫されたものである。

(6) 二天一流が熊本に残されたいきさつ

流祖、新免武蔵（1584～1645）は57歳から62歳で没するまで熊本で過ごした。その間、習得した兵法の集大成を五輪書、独行道に書き顕し、ここに二天一流五方の形を完成させた。爾来、二天一流野田派として熊本県剣道連盟にて保全、管理に努めてきた。以降の保全発展を充分ならしめるため、剣道範士一川格治を十七代師範とし流儀を継承し熊本武道館にて指導普及させてきた。現在は熊本県剣道連盟がこれを継承している。

(7) 新免武蔵の木剣

流祖、新免武蔵に関係する木剣は3種類ある。
一つは、二天一流、五方の形稽古に用いる木剣
へラと称する。大刀二本、小刀一本。大刀の長さは三尺三寸五分（二〇センチメートル）、小刀の長さは二尺（六一センチメートル）。軽く薄い白櫛づくり。
二つは、佐々木小次郎との立会木剣

八代城主、長岡佐渡守興長の孫が武蔵に「巖流との立会の木剣は？」と質問した折、「実物を作りましょう」と白樫の棒を削り、長さ四尺一寸六分（二二六センチメートル）、重さ二二〇匁（八二五グラム）の木剣を創りあげた。このレプリカが三菱武道場「思齋館」神前に展示されている（写真）。因みに小次郎の「物干竿」の長さは、三尺二分（東一尺として二二センチメートル）。

三つは、靈巖洞展示木剣
長さ四尺一寸六分、重さ三八〇匁（二四二五グラム）。

(8) 二天一流と二刀一流

五輪書は、「万事に於いて我に師匠なし、この書を作るといへども仏法、儒道の古語をもちからず軍記、軍法の古きことも用いず」と自信に満ちてその神髓を伝えている。二天一流は流名を二刀一流とも称しているの、常に手に大小の二刀を持つ双刀術と受け取られるが、真意は「武士は将卒ともに二刀を帯びている。この刀、脇差の長所を知らせるために『二刀一流』と称する」と説いている。流儀の初心者は右手、左手とも不自由なく使えるように鍛錬しなければならぬ。その訓練が大切である。武士が一命を捨てる時は、「道具」は残さず役に立てた



松井家 旧八代城主家室
宮本武蔵自作木太刀
松井直之(三代目八代城主) 幼少の頃、その命により宮本武蔵が佐々木巖流との仕合に用いた木太刀と同様のものを面前にて複製し、差出したものであり、それと当主の承諾を得て複製したものである。
昭和四十二年七月十九日
熊本県八代市松崎町七番地
当主第十五代松井明之
熊本県宮本武蔵遺跡推定
第一六一号
李家 孝 殿

いものである。道具を役立たせず腰におさめたまま死ぬということとは不本意であろう。剣の技法の面から言えば両手で刀を持ち、自由自在に行動するのは至難の業である。鎗（やり）、長刀のような大道具は別として、太刀、脇差はいづれも片手にて持つ道具である。片手打ちの武具である。刀を両手で持つて不都合なこと、馬上駆け走る時、沼地、坂道、人混み、両手に太刀を持つこと実の道にあらざる。もし片手にて打ち殺し難き時は両手にて打（うち）とむべし。手間の入ることにてもあるべからず。まず片手で大刀を振り習わせるために二刀として振り方を覚えさせるのである。太刀は広いところで使い、脇差は狭いところで使うのが理に合っている。長いものでも勝ち、短いものでも勝つ。長短を問わず勝つことを得る「心と技」を学びとるのである。大小長短にとらわれず臨機応変に対応することが肝要である。二刀を用いる真意は持てる道具、手段をフルに活用し勝つのであり、左右の手を自由自在に使いこなすため、鍛錬するのである。学問に、仕事に、世に処する方法に、持っている力を十二分に活用せよと説いているのである。

(9) おわりに

五輪書の終わりには、「よくよく鍛錬あるべき事」、「よくよく吟味あるべきこと」との文言が少なくない。「千を鍛と言い、満を錬」と伝えた先哲の励ましには血の滾（たぎ）る思いがする。我々、道の修行者は、過去から引き継いだ文化を現代にどう活かすか時代のどどのように伝えていくか？その内容と方法の充実が「一大事」であるとの認識を深く真摯に持たなければならぬ。我々は、個人としても民族としてもリレー選手の如き役割を担っていると思う。私は私のレーンを懸命に走る。そして、上手に次の選手にバトンを渡す役割を果たしたいと願う。